

暮らすなら名古屋

2009年完成上映の「歪（ひずみ）屋」を皮切りに、空襲、名古屋城、城下町、堀川など名古屋をテーマにした映画を撮り続けてきました。

映像制作の初体験は、桜台高校の生徒のときです。同級生だった山村浩二（=多くの国際賞を受賞しているアニメ映画作家）といっしょに、文化祭で上映する8ミリ作品を作りました。それから専門学校に入って映像の勉強をしながら自主映画を制作していたとき、歌舞伎役者の方に芸能界入りを勧められ、東京へ出て役者になりました。

テレビや舞台の仕事をしながらニューヨークなど海外にも活動の場を広げていたのですが、結婚を機に名古屋へ腰を落ち着けることにしました。私には「暮らすなら名古屋」でした。子供のころから円頓寺・四間道界隈の空気を吸って育ち、名古屋の学校で学びました。家庭を持ち子供を育てることを考えると東京やニューヨークではなく、やはり名古屋だったのです。

映画づくりはまちづくり

生まれ故郷の西区で暮らすようになって、地元を舞台にした映画作りに取り組みました。円頓寺・四間道界隈は、江戸時代のたたずまいと新しいビルが同居する不思議な空間です。ここを舞台に、地元の人が参加する映画を撮りたいと考えました。それが江戸時代と現代をタイムスリップする冒険活劇で「歪（ひずみ）屋」という作品です。

この映画を作っているときに、「映画づくりはまちづくりだなあ」と言ってくれた人がいました。それからですね、まちづくりを強く意識しながら映画を作るようになったのは。続いて開府400年を記念する山車祭りを1年かけて取材し、「開府400年 名古屋の山車祭り」を2010年に完成させました。そのときは皆さんから「名古屋の宝物ができた」と言っていた。うれしかったですね。もともと開府400年を記念する映画を撮ろうと考えたのは、そういう願いがあったからです。

というのは地元のお年寄りの方々が、開府300年記念の絵葉書を今も宝物にされているのです。100年以上前の記憶を共有し、それを話題にさ

名古屋の宝物として 時を超えて楽しんでいただける 映画を作りたい



映画「堀川物語〜川と人と街」の撮影風景

れている。開府400年の時空間を映像として残せば、開府500年のころ見る人にも、時を超えて楽しんでいただけるのではないかな。そう考えるようになりました。

新作のテーマは、人間の命の使い方

今は、ゼロ戦搭乗員だった98歳の方のドキュメンタリーを制作中です。長野で幼児教育に取り組むこの方は、戦争体験についてずっと沈黙を守ってこられました。しかし湾岸戦争をテレビで見た子供たちが「ゲームみたい」と話しているのを目の当たりにして、ご自身の体験を踏まえ平和を訴える講演活動を始められたのです。私はこの映画を通して、人間の命の使い方について考えていただけたらと思っています。

名古屋に生まれ、名古屋をテーマに映画を撮ってきて実感しているのは、名古屋は世界のお手本になる街だということです。物質的に豊かで自然環境にも恵まれている。日本を引っ張るモノづくりの技術があり、歴史的人物も輩出している。私はこれからも名古屋を拠点に活動し、貴重な文化や歴史を映像として記録し発信していきたい。

それと並行して、若い人たちがもっと映画を制作できるような環境も整えていきたい。いま計画しているのは「時空間アクセスタミナル」と名付けた、中高生から参加できる上映会やコミュニケーションの場作りです。伝えたいことを映像で伝えられる場所を設け、映画に関わる人たちのネットワークを育てることで、名古屋に映画作りを根付かせたいのです。



名古屋活動写真 代表

森 零さん

もり ぜろ / 1965年、名古屋市に生まれる。東京、ニューヨークなどで役者として活動したあと、故郷の西区円頓寺界隈を拠点に映画制作を開始。映画制作集団「円頓寺活動写真」「名古屋活動写真」を立ち上げる。映画監督。映像専門学校講師。ギャラリーショップ経営。